



土地活用



アートプロジェクト
記録集

森ビル株式会社タウンマネジメント事業部、文化事業部森美術館





「67エス／ROPPONGI CROSSCHOOL☆FESTIVAL」

日程：2024年9月27日～9月29日

会場：港区六本木6-2-3（麻布消防署仮庁舎用地）

協力：東京都立六本木高等学校、広尾学園高等学校

主催：六本木商店街振興組合

共催：六本木材木町商店会

後援：港区

FOOD

ART

STAGE

「土地活用アートプロジェクト」

主催：森ビル株式会社タウンマネジメント事業部、文化事業部森美術館

参加作家：青山悟、山本晶

参加校：港区立麻布小学校、港区立六本木中学校、広尾学園中学校・高等学校

協力：六本木商店街振興組合

助成：文化庁

コーディネーション・制作：ArtTank、大木彩子、宮崎有里

本企画は2024年8月～11月に森ビル株式会社タウンマネジメント事業部、文化事業部森美術館が港区にある区立麻布小学校、区立六本木中学校、広尾学園中学校・高等学校の有志の生徒たちを対象に、六本木商店街振興組合、東京都、港区の協力と文化庁からの助成を得て、現代美術作家の青山悟、山本晶との協働により実施した産学官民連携アートプロジェクトです。森ビル・森美術館はこれまでも港区の学校との連携によりさまざまなプログラムを行ってきましたが、それを一層強化し、港区の若年層及び次世代の観客のために文化的な学びの場を作り、また、港区に在住・在勤、来訪される方や地域商店街の方々との文化的な交流の場を創出することを目的として、地元の3校の生徒たちと「現代美術作家によるアート共同制作」「アート鑑賞ワークショップと振り返りの会」という2つのプログラムを行いました。

本プロジェクトの根は、現在空き地となっている麻布消防署仮庁舎建設用地の活用方法を検討するために、2022年秋から2023年春にかけて六本木商店街振興組合主催で開催された「みらい会議」にあります。全国の学生たちによるこのアイデアソンでは、六本木のグルメと歴史に関する企画が採択され、それが進化しフード・フェスティバルという案になり、港区長へのプレゼンを経て、最終的には「6フェス／ROPPONGI CROSSCHOOL ☆ FESTIVAL」となりました。そして「土地活用アートプロジェクト」の実施に至ったのですが、これはこれまで関わった数多くの生徒たちのアイデアと熱意、努力が結晶したものだといえます。

本プロジェクトはこのようにさまざまな変遷を経て、最終的に森ビル・森美術館の主導により実施されました。東京都の管理下にある公共用地を舞台に産学官民連携アートプロジェクトを行うことは森ビル・森美術館にとって新たな試みで、限られた時間の中、手探りで行われたものでした。この活動が現代美術を主軸とした、地域の若年層のクリエイティブ・マインドの醸成と地域交流の促進、コミュニティの繋がり強化に少しでも貢献し、本記録集がこのような趣旨のプロジェクトを未来に繋げるものになれば幸いです。

最後になりましたが、本プロジェクトの実施にあたり作家の青山氏と山本氏、参加学校のみなさまなど、多くの方々や諸団体から多大なご支援、ご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

主催者

03 はじめに

05 事業概要

06 青山悟+広尾学園中学校・高等学校 作品共同制作

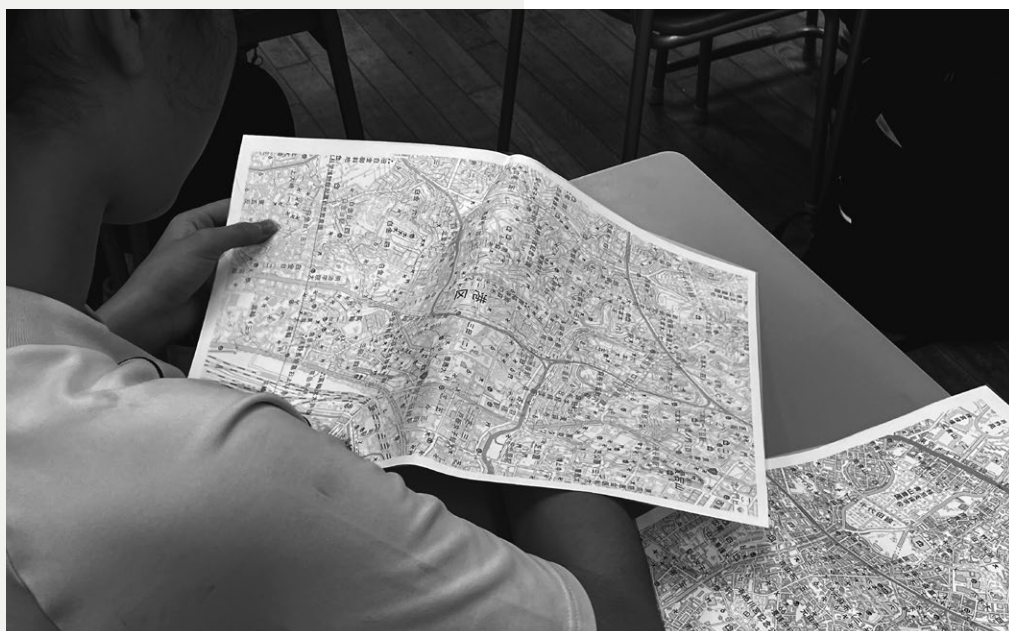
09 山本晶+麻布小学校・六本木中学校 作品共同制作

12 アート鑑賞ワークショップ

13 振り返りの会

16 参加者紹介

17 おわりに



プログラム1

3校の生徒たちと現代美術作家によるアート共同制作

青山悟、山本晶が各学校を訪問して有志生徒たちと美術作品を共同制作し、9月27日～29日に麻布消防署仮庁舎用地で完成した作品を一般公開しました。この公開イベントは、六本木商店街振興組合が主催し広尾学園高等学校、都立六本木高等学校の有志高校生が企画・制作したアート、フード、ステージで構成されるイベント「6フェス／ROPPONGI CROSSCHOOL ☆ FESTIVAL」の一部であるアートセッションとして実施され、27日夕方にはオープニングセレモニーも開催されました。このフェスティバルは六本木地区で毎年開催される大型アートイベント「六本木アートナイト」の2024年版と同時開催され、多くの人々が作品を鑑賞しました。

プログラム2

3校の生徒たちと現代美術作家の参加によるアート鑑賞ワークショップと振り返りの会

森美術館のラーニング担当のガイドにより、3校の生徒たちと青山悟、山本晶が六本木ヒルズにあるパブリックアート作品を鑑賞し、作品のコンセプトや、誕生した経緯、その背景にある六本木地区の歴史を学び、作品鑑賞後に感想を共有しました。その後に開催された振り返りの会では、共同制作、作品公開、アート鑑賞ワークショップに参加した全体的な所感を共有し、作家2人と生徒たちの間で活発な意見交換・質疑応答がなされました。





青山悟+広尾学園中学校・高等学校 作品共同制作

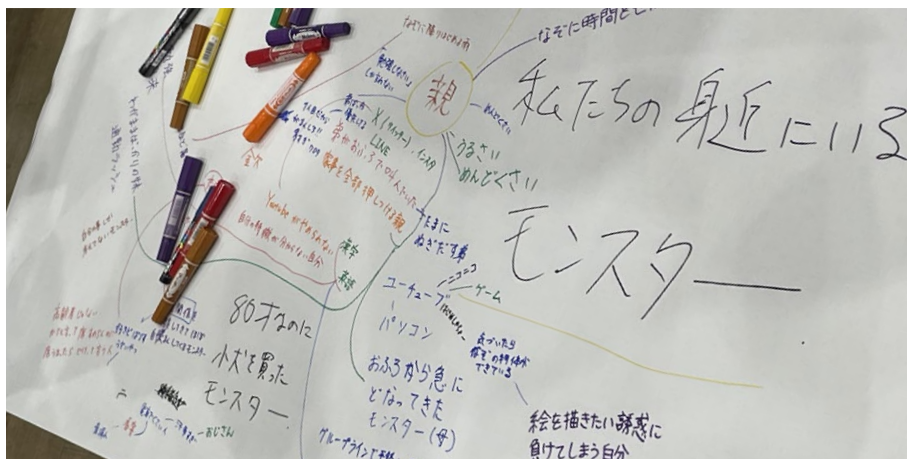
共同制作日程

8月27日 ワークショップ+共同制作1

9月9日 共同制作2

9月14日 共同制作3

参加者：青山悟、石川晶子（制作アシスタント）、生徒各回15名程度、土田義昌先生（担当教員）、大木彩子（コーディネーター）、宮崎有里（コーディネーター）、森ビル・森美術館スタッフ





完成作品

青山悟+広尾学園中学校・高等学校有志

《カオスな仲間たちと夜更かし》2024年

布、フェルト、糸、接着剤ほか 200×200cm

青山悟蔵

作品公開

9月27日～29日

麻布消防署仮庁舎建設用地において「6フェス／ROPPONGI CROSSCHOOL ☆ FESTIVAL」のアートセクションとして公開

(「六本木アートナイト2024」と同時開催)

作品概要

共同制作は港区や自分の関心事、身近にいるモンスターたちというテーマから連想されるものをマッピングするワークショップで始まりました。最終的には「身近にいるモンスターたち」というキーワードが選ばれ、生徒はそれを念頭に置きながら、色とりどりの布を中心に自宅からもってきた小物なども混ぜて自由に制作を行い、たくさんのパーツが完成しました。それを青山がスタジオで1枚の布の上に港区の形になるように縫い合わせて、本作は完成しました。

作品のタイトルは今回の制作を振り返りつつ生徒が選んだ「夜更かし」と「カオスな仲間たち」という2つの言葉を組み合わせたものです。モンスターという言葉が意味するものは、多くの場合、恐ろしい化け物や怪物、もしくはゲームのキャラクターですが、並外れた能力を持つ人や規格外な人物など、さまざまなものが連想可能です。中高生が思い描いた今日のモンスターの多様な表現には、生徒たちが感じている脅威の一端を読み取ることもできるでしょう。また、作品公開後に開催されるアート鑑賞ワークショップで六本木ヒルズのパブリックアート作品を鑑賞する予定があることから、ルイズ・ブルジョワの《ママン》(1999/2002年)などこれらの作品のイメージも本作には組み込まれました。

制作を振り返って

広尾学園の生徒さんたちと出会った初日に、作品発表までそう多くの時間がないこと、傑作にするつもりであること、そのために一人ひとりが作家としての自覚を持ってほしいことなど、今思えば随分と高いハードルを課してしまったのですが、最終的にこちらの想像をはるかに上回る素晴らしいものができました。これは生徒のみなさんの想像力と集中力の賜物です。作品は今後も広尾学園に飾られると聞いています。いずれ作品と制作に関わった生徒さんたちとの再会が叶うことを夢見ています。

青山悟





山本晶+麻布小学校・六本木中学校 作品共同制作

共同制作日程

○麻布小学校

- 9月6日 ワークショップ
- 9月13日 共同制作1
- 9月19日 共同制作2
- 9月20日 共同制作3

参加者：山本晶、近藤太郎（制作アシスタント）、生徒各回53名、大島涼子先生（担当教員）ほか学校スタッフ、宮崎有里（コーディネーター）、森ビル・森美術館スタッフ

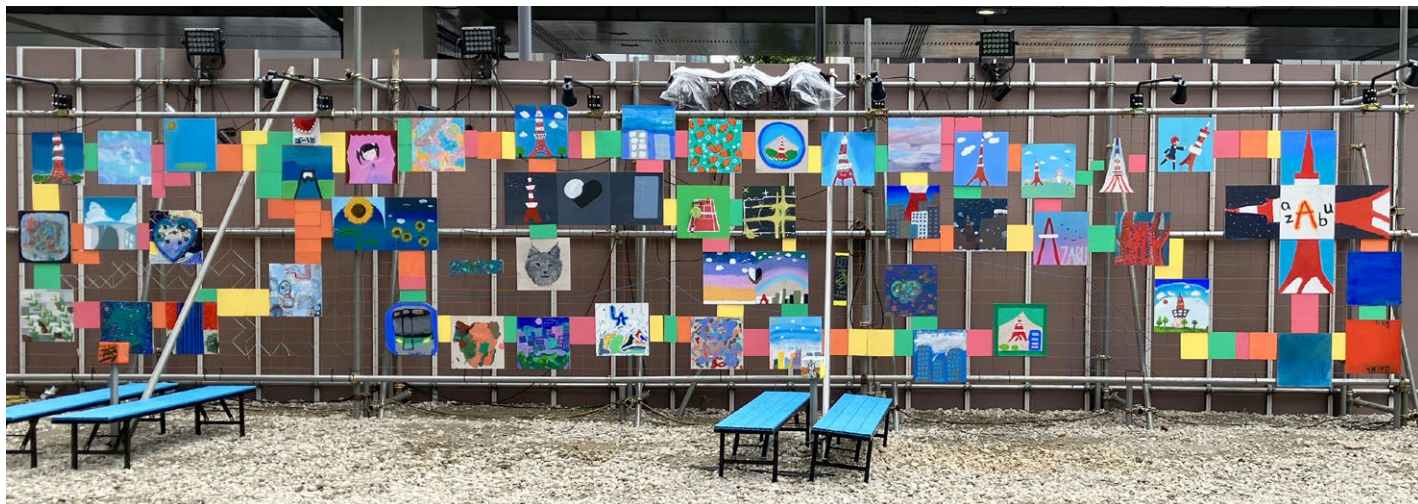
○六本木中学校

- 9月5日 ワークショップ+共同制作1
- 9月12日 共同制作2
- 9月20日 共同制作3

参加者：山本晶、近藤太郎（制作アシスタント）、生徒各回4～6名、高橋大祐先生（担当教員）、中野浩道先生（担当教員）、宮崎有里（コーディネーター）、森ビル・森美術館スタッフ





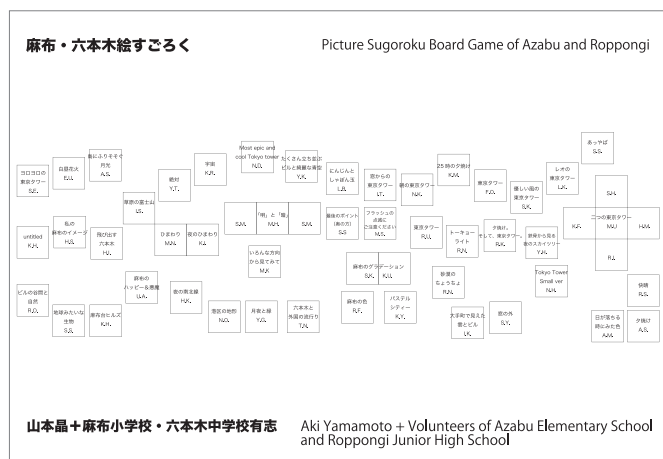


完成作品

山本晶+麻布小学校・六本木中学校有志
 《麻布・六本木絵すごろく》2024年
 板にアクリルほか サイズ可変
 港区立麻布小学校、港区立六本木中学校蔵

作品公開

9月27日～29日
 麻布消防署仮庁舎建設用地において「6フェス／ROPPONGI CROSSCHOOL ☆ FESTIVAL」のアートセクションとして公開
 (「六本木アートナイト2024」と同時開催)



作品概要

山本は両学校を訪問し、麻布小学校の6年生と六本木中学校の美術部を中心とした生徒に、港区の地図を使ったワークショップやレクチャーを行い、赤坂など港区が主題になった浮世絵や江戸名所双六、ボードゲームなどのイメージを紹介しました。その後、生徒一人ひとりが定型サイズの板を好きな形に加工し、アクリル絵の具を使い自由なスタイルで絵画を制作しました。山本はそれら55点の絵画を、港区の地図にみためたメッシュの上にカラフルな板と組み合わせて並べ、1つの大きな双六として完成させました。

港区の地形の特徴である台地や古川、海などが読み取れる地図と展示作品は緩やかに呼応しており、例えば地図上で東京タワーがある場所にはその主題の絵画が配されています。港区各地からタワーが見えることも表現されています。また、展示では、共同制作のアシスタントを務めた近藤太郎の制作によるサイコロを模したオブジェを加えるという演出もなされました。

生徒たちは、麻布・六本木をはじめて訪れる人やこれからやってくる人、海外の人などに今の麻布・六本木を伝え、未来に残していくことを念頭に一枚一枚を描きました。この巨大な双六は生徒たちの「今」の興味・関心を未来に残すものになるでしょう。

制作を振り返って

学校行事の合間をぬって、ドキドキしながら生徒さんと一緒に疾走しました。一瞬の思いつきがどれほどキラキラしたものなのか。生徒さんには自由に描いてといたしましたが、これが意外と難しい。描き続ける新鮮な気持ちをキープさせることこそアートです。アートよ、逃げないで。こっちこっち。複数の絵の具を混ぜる面白さ、隣に色を置くとその前に置いた色が違って見える不思議、筆のつくる偶然…。生徒さんのハツとした表情を見るたびに、私はシメシメと思っておりました。

山本晶





アート鑑賞ワークショップ

11月13日 麻布小学校

11月19日 六本木中学校、広尾学園中学校・高等学校

森美術館ラーニング担当の徳山拓一と白木栄世がガイドを務め、生徒たちと青山、山本が六本木ヒルズにあるパブリックアートのルイズ・ブルジョワ《ママン》(1999/2002年)、イザ・ゲンツケン《薔薇》(1993/2003年)、マーティン・プーリエ《守護石》(2003年)、ジャン＝ミシェル・オトニエル《Kin no Kokoro》(2013年)を鑑賞しました。

各作品のコンセプトや六本木ヒルズに作品が設置されることになった経緯などとともに、《ママン》が実は地面に固定されていないことや《Kin no Kokoro》が角度によっては∞(無限)のマークに見えることなど作品の意外な事実を知りました。《Kin no Kokoro》がある毛利庭園の誕生は約350年前の江戸時代であり、その後、ウイスキー工場やテレビ局の私有地となり、現在に至っているという土地の変遷など、作品と歴史についても学びました。

また、今回共同制作した作品は屋外の公共空間に誰でも鑑賞可能な状態で展示されましたが、これは六本木ヒルズのパブリックアート作品も同様だという気づきが、生徒たちにはありました。





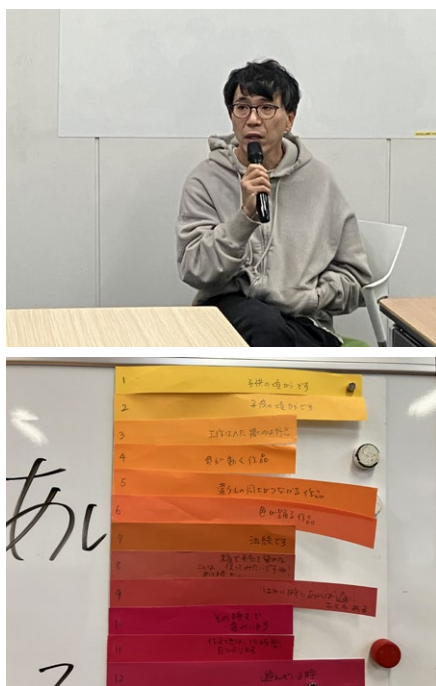
振り返りの会

11月15日 麻布小学校

11月19日 六本木中学校、広尾学園中学校・高等学校

参加者：青山悟、山本晶、各校の生徒たちと先生、臼井浩之理事長（六本木商店街振興組合）、宮崎有里（コーディネーター）、森ビル・森美術館スタッフ

コーディネーターの宮崎有里の進行で、記録写真を見ながら共同制作と作品公開の過程を振り返りました。その後、本プロジェクトの企画者、森美術館の近藤健一のファシリテーションにより生徒たちが本プロジェクトに参加した感想が共有され、質疑応答をとおして生徒たちと作家との間に活発なやりとりや意見交換がなされました。最後に、各校の先生や六本木商店街振興組合理事長からも感想をいただきました。



生徒たちの感想と青山、山本からの応答

麻布小学校生徒：今までとは違う授業で、新鮮さを感じました。アーティストさんと一緒に作品を作ったり、一人で集中して作るだけでなく友達とアイデアを交換しあったりすることで、新たな気づきなどがあり、自分の作品をさらに良いものへと上げることができました。また、一つひとつの絵に個性が出ていて面白いと思いました。このような貴重な機会を用意していただき、ありがとうございました。

麻布小学校生徒：作っている時、アーティストの方々がアドバイスしてくれたおかげで、自分の描きたい物を描く事ができました。展示されているのを見た時、みんなの個性が輝いているなど感じました。

山本：みなさんの作品を繋げるために、一枚一枚を見ながら、マス目に使う4つの色を決めました。色がひらめいたり、汗だくになりながらマス目に使う木を切ったり、色を塗ったりできていた自分に驚きつつすごく面白かったです。

六本木中学校生徒：筆使いや色の出し方が難しかったが、アーティストさんに教えてもらって上手くできました。

六本木中学校生徒：六本木に飾られている自分の作品を見れてすごうれしかったです。

広尾学園生徒：団体で作品を作ったのは初めてだったので難しかったけど、挑戦したことのないジャンルのものが作れて良かったです。みんなで作った作品が飾られていて達成感がありました。

広尾学園生徒：最初は具体的なアイデアが思い浮かばなかったけれど、青山さんが「自由にやって良いんだよ」と言うてくれて、本当に自由にやったら良い反応をしてくれて嬉しかったです。

青山：みなさんのアイデアは自分には出てこないすごいものばかりでした。もう一日制作できたらもっと港区の建物やランドマークを入れられたと思うので、ぜひまたやりましょう！

生徒たちからの質問と青山、山本からの回答

麻布小学校生徒、広尾学園生徒：作品のアイデアはどうやって思い付きますか？

山本：人とおしゃべりしていると気になる言葉があって、そこから思い付くこともあります。また移動中や明け方、一人でいるときに、ぼんやりと大事にしたいいくつかのキーワードが、はっとしたときに固まって結晶になることがあります。

麻布小学校生徒：今までにどれぐらい作品を作ってきましたか。また自分が作った作品の中で最高傑作は何ですか？

山本：数えきれないほど作りました。最高傑作は毎日変わります。その日に良いなと思ったものが最高傑作です。

青山：若い頃はアイデアが浮かばず、人に相談していました。一つ作品を作るとそれが呼び水となって、また新しい作品が浮

かびました。アイデアよりも作家として作るモチベーションを見つけることが大事です。私自身は海外で日本人というマイノリティとして過ごした経験から、社会の中の困難を気にするようになりました。みなさんにもぜひいろんな変わった体験をしてほしいです。

六本木中学校生徒：作品を作る時に楽しいことは何ですか？

山本：作品を作ることは時間もお金もかかります。生活と作ることが反比例していて苦しいこともあるので必ずしも楽しいわけではないですし、絵を描いているときも、これで大丈夫か？と不安に思うことがあります。ですが振り返ってみると、それら全部が楽しいのかもしれない。

各校の先生、六本木商店街振興組合からのコメント

麻布小学校 大嶋涼子先生：友達と相談しあったり、互いの作品を見て個性を認識しあったり、アーティストと生徒たちの間だけでなく、生徒同士の間でもいつもと違うコミュニケーションが生まれた作品制作の時間となりました。また、生徒たちがアートに関わるいろんな仕事を知る機会にもなりました。仮に生徒たちの人生に直接関わらないことでも、考え方に影響を与える経験になったと思います。

六本木中学校 中野浩道先生：展示を見て感動しました。アートっていいなと自分自身も感じる事ができました。

広尾学園 土田義昌先生：生徒にとって良い経験をさせてもら

いました。また自分にとっても生徒はこんなアイデアを浮かべることができるのだと発見がありました。

六本木商店街振興組合 白井浩之理事長：今回は東京都と港区の協力を得て、普段はアーティストが展示できない場所で作品展示を実施することができるという特別なイベントになりました。それをたくさんの人に見てもらうことができるとも嬉しいです。今後も若手アーティストに展示の機会を作っていくと考えているので、みなさん、また何かあればぜひご協力をよろしくお願いいたします。



制作を振り返って

私はアーティストとご協力いただいた3つの学校との連絡調整、共同制作のサポート、記録撮影など、プロジェクトのコーディネーションを担当しました。まず、日々の学校業務がある中、細やかにご協力いただいた先生方には大変感謝しております。

山本さんは「美術に親近感を持ってもらいたい」という想いで、生徒さんたち一人ひとりに接していた姿が印象に残っています。特に、「絵が苦手」と言って描き始められない小学生が、「好きなものは?」「何色が好き?」などと山本さんがその子の話を聞き続けていると、制作2日目について「やるか～」とめんどくさそうな、でもどこか嬉しそうな顔をして、絵の具を塗り始めた瞬間が心に残っています。

青山さんは誰よりも手を動かされている様子が印象的でした。勢いよくハサミで布を切っていく姿は、生徒さんたちのお手本となり、制作を前へ導いていました。彼ら彼女らは、初日のブレストから、アイデアスケッチ、制作、タイトル決めまで、アーティストがまさに作品を作るための過程を、アーティストとともに経験できたのではないのでしょうか。

いずれのアーティストと生徒さんたちの制作現場においても「励まし」があったように思います。アーティストと生徒、先生と生徒、生徒同士…互いの作品や作り方を見合って、どんどん自由な創作が生まれていきました。「土地活用アートプロジェクト」が、生徒さんたちにとってこれから先の未来で、創作活動や美術を鑑賞する機会の励みとなっていれば嬉しいです。

宮崎有里(本プロジェクト・コーディネーター)

青山悟

1973年東京生まれ。現在、同地在住。

1998年ロンドン大学ゴールドスミス校テキスタイルアート科卒業。2001年シカゴ美術館付属美術大学大学院ファイバー&マテリアルスタディーズ科修了。祖父は二科会員の画家で、幼い頃から美術に触れる環境で育つ。1940年代の工業用ミシンを通して、近代化以降の変容し続ける人間性や労働の価値を問う作品を制作する。近年はアートセミナーや学生向けワークショップを開催するなど、積極的に活動の幅を広げている。



広尾学園中学校・高等学校

美術部を中心とした生徒16名

担当教員：土田義昌先生



山本晶

1969年東京生まれ。現在、同地在住。

1995年武蔵野美術大学大学院造形研究科修了。見た風景をもとに形や影などを色面で構成する平面作家。初期には抽象表現主義のような勢いのある筆致を特徴としていたが、文化庁在外研修員として渡米した2005年頃から作風に転機が訪れ、窓や建造物の構造といった都市的・幾何学的な部分を切り取って頭の中で構成するスタイルが中心となっていった。近年は加えて映画のパノラマを見るように一画面に多視点を同時に創出する試みも行っている。



港区立麻布小学校

6年生53名

担当教員：大嶋涼子先生



港区立六本木中学校

美術部を中心とした生徒6名

担当教員：高橋大祐先生、中野浩道先生



本プロジェクトは森ビル・森美術館で「六本木アートナイト2024」を担当するスタッフを中心に構成されたチームにより企画・制作・運営され、私はキュレーターという立場から企画全体の統括を行いました。私自身このような企画は過去に未経験で、経験値の高い同僚や外部の協力者からの多くの助言を得て、本プロジェクトを行うことになりました。その中で、数多くの学びや発見がありました。

まず、共同制作では、参加してくれた生徒さんたちの熱意と絵心には感服しました。まだ粗削りではあるがキラリと光る表現の芽を見ることができました。考えてみれば、港区という都心の学校に通う彼らは、仮に意識していないとしても、おそらく普段から一流の美術作品やデザインを目にしており、それが彼らの表現ににじみ出ているのではないかと思います。また、振り返りの会でも、作家2人への質問は興味深いものが多く、プロの作家というものに対する生徒さんの関心の高さが感じられました。

また、作家2人の普段の制作における姿勢が今回の共同制作にも反映されているように思われました。例えば、コンセプチュアルな作風で知られる青山は、今回の共同制作でも作品コンセプトに基づくゴールを設定し、それに向けて生徒たちと丁寧な対話を繰り返し、自ら手を動かして共同制作を牽引していきました。展示には生徒たちが共同制作の中で描いたドローイングを加え、その思考の過程も公開しました。一方、山本の指導では、生徒一人ひとりの個人の表現を引き出すことに注力を注いでいるように見うけられました。作品展示に際しては、絵すごろくとして全体にまとまりを作りつつ作品を進化させようとサイコロを加えるなど、新しいアイデアを具現化し、完成ギリギリまで全力を尽くして制作を行いました。

そして、本プロジェクトを暖かく見守り、当方の無理なスケジュールにも柔軟に対応し生徒たちをまとめて共同制作の時間を捻出してくださった、各校の担当の先生方のご協力がなければ、この企画は成立しなかったと思われます。心より感謝の意を表したいと思います。

近藤健一（本プロジェクト企画統括、森美術館シニア・キュレーター）

プロジェクト

企画統括：近藤健一（森美術館）

企画調整：加藤宗衛、清水拓郎（森ビル株式会社タウンマネジメント事業部）

ラーニング：徳山拓一、白木栄世（森美術館）

展示制作：山縣青矢、水品真実（森美術館）

コーディネーション・制作：小平悦子（ArtTank）、大木彩子、宮崎有里

記録集

編集：近藤健一（森美術館）

デザイン：ヤング荘

制作協力：小平悦子（ArtTank）



土地活用 アートプロジェクト 記録集

制作・発行：森ビル株式会社タウンマネジメント事業部、文化事業部森美術館

発行日：2025年2月10日

本書の無断転載を禁じます

©2025, Mori Building Co., Ltd., Mori Art Museum

<https://www.mori.co.jp/> <http://www.mori.art.museum/>